

2012年9月に「アイヌモシリと平和—〈北海道〉を平和学する」を出版された越田清和さんに、本の背景にある歴史と思想について語っていただいた。

アイヌモシリから平和を考える ——平和学と脱植民地

越田 清和(ほっかいどうピーストレード)



「アイヌモシリと平和」越田清和著
法律文化社発行

9月に、私が編者となった「アイヌモシリと平和—〈北海道〉を平和学する」(法律文化社)という本を出した。タイトルに「アイヌモシリ」という言葉をいれるかどうかで、出版社の担当者と意見が分かれた。出版社としては、なじみのない「アイヌモシリ」ではなく、「北海道」にしたかったようだ。私としては、アイヌ民族が先住していたこの島(「北海道」)を「アイヌモシリ」と呼んでいくようにすべきではないか、それが歴史を考え直すための一歩だと考えていたので、「アイヌモシリ」にこだわり、何とか「アイヌモシリ」が入ったタイトルになった。

なぜ、そこまでこだわるのか。この本の「序章」で、こう書いた。

「私(たち)がいま住んでいる島を「北海道」ではなく「アイヌモシリ(人間の住む大地)」と呼ぶことは、たんに呼び方を変えたというにとどまらない意味をもつ。「アイヌモシリ」と呼ぶことは、アイヌ語にふれ・アイヌ民族とこの島の歴史を考えることにつながり、アイヌ民族の視点から歴史と現在を考えるための第一歩になっていくかもしれないことだ、と私は考えている。それが「植民地支配という認識」をもつことにつながっていく」。

植民地支配という認識をもつことについて、もう少し考えてみたい。

私は、札幌(サツ・ポロ・ベツ 乾いた・大きな・川)で生まれ育った。「明治」になってから本州から北海道・アイヌモシリに渡ってきた日本人の末裔である。私の世代(五十代)くらいまでは、自分たちの祖先は、この島に「移住」してきたという自覚がある。ただその自覚は、私の祖父母のような「移住」者がどんなに苦勞してきたかという思い出話をもとにつくられてきたので、日本人がこの島を植民地にしたという認識にはつながらなかった。アイヌ民族がいることは知っていたが、その人たちが違う言葉や文化をもち、時によっては一つの「国」のようにまとまって行動したなどと

は考えもしなかった。

まして、「北海道」生まれの親に育てられた若い世代には、「移住者の末裔」という意識もないだろう。学校教育の中でアイヌ民族について知る機会が少しは増えたかもしれないが、そのほとんどがアイヌ文化についてだろう。アイヌ文化を創り出した大地や海、川が、今どうなっているかを知る機会はほとんどない。

いま「北海道」に住む非アイヌ日本人(和人と呼ばれてきた)の意識を大まかに説明すると、こうなるだろう。このような意識からは、アイヌ民族をユニークな文化を持つ集団と考えても、自分たちのルールをつくってこの島でくらししてきた民族と考えるのは難しい。

日本社会で最も知られたアイヌの一人である萱野茂^{かやの しげる}さんが、「わたしたちは、『旧土人』などではない。私たちは北海道、すなわちアイヌ・モシリ(人間の・静かな大地)という『国土』に住んでいた『国民』であったのです。その『国土』に『日本国』の『日本人』が侵略したのです」(萱野茂「アイヌの碑」、朝日新聞社、1990年、78ページ)と述べてから、すでに30年以上過ぎたが、「日本人が侵略した」という歴史観や日本人のことばと文化を押し付けられた事実は多くの日本人にはなかなか受け入れられない。

「北海道」という島を日本人が植民地として支配したという歴史観を、日本人、とくに若い世代が持つようになるためにはどうすればいいのかと考え、この島の名称をアイヌの人たちが呼んだ「アイヌモシリ」に変える、もしくは「北海道」と併記することが、その第一歩になるのではないかと提案したのである。本来であれば、アイヌ民族を日本の先住民族と認めた日本政府が行うべきことなのに、という怒りの気持ちもこもっている。

平和学と脱植民地化という問題も、この本で考えてほしいテーマだ。これは、平和学をどうやって「市民の科学」にしていくかとい

う問題でもある。

私は日本平和学会の会員なので、「平和学」という言葉をあたり前のように使うが、多くの人にとっては馴染みのない学問かもしれない。しかし、平和について考え、行動している人は多い。今の平和学が、こうした多様な取り組みや声をどれだけ反映しているのか、大いに疑問がある。

「アイヌモシリと平和」の序章で、こう書いた。

「平和学には、平和研究・平和教育・平和運動という三つの柱がある、とよく言われる。平和学の先達である岡本三夫は「平和学が、専門特化に伴う保守化や動脈

硬化などの陥穽^{かんせい}を避けつつ、学問として成熟して行くためには、平和学を誕生させた源泉としての平和運動と平和教育へ、たえず立ち戻る必要がある」と述べている（『平和研究の展開』、日本平和学会編集委員会編『平和学—理論と課題』、早稲田大学出版会、1983年、39ページ）。この指摘は、今も（今こそ）重要な意味を持つ。

しかし、岡本が平和学の源泉と呼ぶ平和運動や平和教育の領域から、平和研究への期待や希望が語られることはまずないし、そこでの対話を持つことも少なかった。また「平和学」と銘打たれた本は、研究者・学者が執筆するものがほとんどで、市民運動や反戦・平和運動のアクティビストからは「難しい」と思われてきた。

これを別の言葉で言うと、平和研究に現場という感覚・視点が弱かったのではないかと。これは、平和学が脱植民地化をきちんと視野に入れてこなかったことにつながる問題だ。「平和憲法」や「被害と加害の戦争体験」「第三世界（南）への構造的暴力」などを前提としたこれまでの「日本の平和学」の立ち位置そのものを見直さなければならぬ。

例えば、「北海道」の平和学会メンバーの多くは、これまでアイヌ民族に対する差別や抑圧は問題にしても、その根底にある植民地支配と侵略の歴史の問題を正面から考えてこなかった。自分たちの生きる地域を、どんな視点から問題にするかをはっきりさせずに、平和や差別について語ってきたのではないかと。



こうした平和学の現状を変え、平和と脱植民地化を実現し、社会を変えていくことに結びつく平和学が変わっていくには、平和運動や平和教育、社会運動などの当事者が、研究者を巻き込みながら、国家や権力を批判する市民の視点から平和実現の可能性を考察することではないか、と私は考えている。

「アイヌモシリと平和」との関連で、思い浮かぶ社会運動がいくつかある。

朝鮮半島から強制連行され、北海道内で死亡した朝鮮人労働者と推定される101名分の遺骨と名簿が東本願寺札幌別院で発見されたことをきっかけに結成された「強制連行・強制労働犠牲者を考える北海道フォーラム」は、遺骨発掘の調査と返還を行なっている。自分の住む地域の歴史を見つめなおすことで浮かび上がってくる植民地支配の事実と、グローバルなレベルでの謝罪・補償を求める動きとなっている。

2008年の「アイヌ民族を先住民族とすることを求める国会決議」以後、アイヌ民族の先住権を求める動きも、アイヌと非アイヌの共同作業という形で進んでいる（「チカラニサッタ」や「WIN-AINU」、20年以上続いている「さっぽろ自由学校「遊」」のアイヌ講座など）。

このような運動が、自分たちで調査・研究するという方法論を育てていくこと、同時に平和学研究者が「大学」という枠を飛び出て、一人の市民として、自らの足もとから平和を考え行動するように変わっていくことが必要になっている。

（こしだきよかず）

2009年ヒューマンライツセミナー
（於：東京）
「先住民族アイヌの権利確立に向けて」